



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

●手数をかけるほど

親が子を育てるにしても、何か物事を成し遂げていくにしても、手数をかけるほど、そこに愛は生まれていくものだ。通り一遍の苦勞でなく、いつも思いをかけ、願いをかけ続けたその先に思いがけない出会いなおしがあれば、いつそうかわいさも増してくる。日々、目の前であれこれと世話を焼かせる我が子も、ひさしぶりの参観日、友だちと一緒に教室で学んでいる姿を廊下からみつけたとき、それなりに成長していることに気付けると、我が子と共に親である自分自身も、一まわり大きくなったような気がしてうれしくなることがある。これもこうした愛のはたらきとあっていいだろう。

要するに、身を入れただけ、面倒をみただけしか、お互いは育っていかないということだ。ものごとは仕事に伴わなければ、真の進展、成長はない。このことを、身をもって了解している人は、少々無理をしてでも、その務め、つまり親なら親として、職員なら職員として、一つひとつのことに心を砕き、励むことができる。もちろんその仕事といっても、ただ単に、これまでどおりの機械的なことだけをたくさんしているだけではよくない。取り組もうとするそのことの意味合い、ねうちを見いだしながら、させていただくといったような心持ちで、ものごとに臨んでいきたい。

19日の参観日のあと、しばらくすると家庭訪問、ゴールデンウィークがやってきます。一つひとつのできごとを大切に受けとめ、取り組んでいきたいものです。

校長 大林 道範